

読解教材の開発

山下早代子 小川 貴士

1. 基本的概念

『*Japanese for College Students*』の読解教材は、第1課に先行する*Getting Started*と第1課から第30課までの各課の主要文法項目の口頭練習につづく*Reading*部から成り立っている。読解教材の本文は以下の基本的概念に沿って書き下ろし教材として作成された。

1) 各課の主要文法項目を含む

各課の前半ではその課の文法項目の口頭練習をフォーメーション、ドリル、ロールプレイなどを通して行うが、*Reading*ではそれらの文法項目が、書かれた形ではどのように使用されるかを、「読む」という作業を通して確認する。

2) 各課で導入される語彙項目を含む

新出の語彙を口頭練習、読解練習両方で扱うことにより、その意味や用法に親しませ、記憶の負担を軽くする。なお、若干の未習の語彙もストーリーの流れから入っている場合もあるが、その場合は英訳をつけてある。

3) 各課で導入される漢字を含む

漢字部と連動させて、漢字の実際の読み物の中での使用の仕方を示す。

4) 読み物のジャンルの多様性を考慮する

文章には様々な種類がある。本書*Reading*では、描写文、説明文、解説文など、読むことによって新しい知識を得る“情報提供型”のタイプの文や、メモ、手紙、身の上相談、広告文、アンケート、など、日常のコミュニケーション上必要な“コミュニケーション型”とも言えるような文、また文学のジャンルに入るような、エッセイ、ストーリーを追う物語、新聞コラム、慣用句（ことわざ）等、様々なジャンルの読み物を扱い、それらに親しませる。

5) 生教材性（authenticity）を重視する

初級ではあるが可能な範囲でより現実の言語活動に近づけたいという配慮から、書き下ろし教材ではあっても、現実の読み物にできるだけ近いものを目指した。

6) 広い範囲の話題（トピック）を含める

本書は若い大学生を対象にしている。したがって、各課の話題も、一般的な情報を提供する説明文（各国の食べ物の説明、ガイドブックの説明文など）の他に、現代にマッチし、時代を反映した、大学生が関心を持つであろう話題（例えば、ポケベル、電子メール、都会のマンション、塾など）を多く扱った。

7) 書式の多様性を考慮する

縦書き、横書き、手書き、段組みなどの多様性に配慮し、さまざまなタイプの読み物に親しめるようにした。例えば作文などの手本になる原稿用紙に書いたものやオーソドックスな手紙文や説明文などのほかに、メニューや図書館の案内の掲示板、宅急便の不在票、最近見かける街頭の電光掲示板に映し出されるニュース等、日々の生活の中で見られる色々な形の文にも親しめるように構成されている。

8) 様々な読解スキルを訓練するような配慮をする

大意や要旨を捉える訓練に適切なもの、学習者が想像力を働かせ、話の展開が追えるようになっていくもの、時間を区切って速読させるもの、逆に十分な準備時間を与え、精読させるもの、会話体なら役割を決めて音読させる、など、課によって色々な読解スキルの訓練が可能である。

9) 場面の多様性に考慮する

本読解の書き下ろし教材を作成するにあたっては、場面シラバス（生活編、大学編）、話題シラバス、日本の行事シラバス（田中、1991）に基づいて場面や話題が選ばれている。したがって、語彙学習を含め、さまざまな場面、話題について、色々な角度から読解作業に取り組める。

10) 応用発展のための材料を提供する

*Reading*を手本にして、共通のトピックで作文を書く、などをはじめ、話題を発展させて、インタビューのプロジェクトを行ったり、アンケートをするといった発展活動に広げることができるものも課によって用意した。

2. 教室活動

本文を扱う際の方法としては、「読む前に」「質問」「書きましょう」「話しましょう」の設問によって、ガイドラインが設けてあり、それらの作業を通して読解が達成されるようになっていく（注：Vol.1の前半では、扱う教材の長さが短いのと、学生が自由に設問を読んで理解するところまで読解能力がいないため、Comprehension Check, Speaking

ActivityまたはWriting Activityになっている）。第10課を例に説明することにする。「読む前に」ではその課のこれから読む話題について学生に質問し、読むための動機づけとし、また文章形式にも注目させることによって読解教材の学習項目を認識させる。第10課では「せんとう」について学生新聞の記事を読む、という設定になっているので、話題に関連しては、「あなたはどこで日本人と会いますか」「せんとうにいったことがありますか」「いつてみたいですか」などの質問をし、また、文体は新聞にのっている縦書きのものであることに注目させる。実際に本文を読んだあとは、「スミスさんはどこにいましたか」「何がありましたか」などの質問により、内容の確認を行う。本文を読むという作

業は黙読、学生の音読、教師のモデルリーディング、漢字や語彙の確認、発音やアクセントの確認等様々なことが含まれる。「書きましょう」では、同じような形式で書くことや、また場所や建物など話題を変えて書いてみる作業を行う。「話しましょう」では、お互いのせんとうや温泉の経験を話すことや、日本人にせんとうにたいする意見をインタビューによって聞いてくる、といった発展活動が可能である。

3. 各課の内容

Getting Started

平仮名と片仮名を導入し、この課の学習項目である挨拶と簡単な応答を平仮名に書き直したものを読む。また、個人の名前、国名、クラスやテキストで使われる語（ドリル、テストなど）の片仮名表記に慣れる。

第1課

人物の顔と結びつけながら、その下に書かれた名前、出身国名、身分（学生、先生）、専攻を読むことによって、平仮名と片仮名に更に慣れるとともに、初めて導入される漢字に慣れる。（横書き）

第2課

漢数字や曜日を用いて書いてある案内書（図書館、プールなど）を読み、また、日本のメニューにも慣れる。（横書きと縦書き）

第3課

近況を伝える簡単な手書きの手紙。（縦書き）

第4課

友達を誘う簡単な手書きのメモ。（縦書き）

第5課

学生寮とアパートの簡単な説明文。（横書き）

第6課

一つの町についての簡単な説明文。（横書き）

第7課

人物の顔と結びつけながら（設定では写真）、性格、趣味、好みなどについて人物を描写した文を読む。（横書き）

第8課

原稿用紙に書かれた学生の作文（旅行の計画や将来のこと）。（縦書き）

第9課

銭湯についての会話文（場所の指示と誘い）。（横書き）

第10課

第九課で扱った銭湯の話題を引き継ぎ、銭湯に初めて行った留学生の感想文が学生新聞に載ったという設定で彼／彼女の経験談を読む。(縦書き二段組)

第11課

電子メールの画面を読む。友人同士の応答の二画面。(横書き)

第12課

友人からの手紙から始まる、空港への出迎えの一日の物語。(横書き)

第13課

第12課の登場人物を引き継ぎ、友人の日本滞在時の物語。(横書き)

第14課

留学生達が各国の食べ物や料理を説明・描写する会話文。(横書き)

第15課

学生による京都旅行の計画についての作文。(横書き)

第16課

二つのアルバイト求人票から始まる、アルバイト探しの話。(横書き)

第17課

入塾をめぐる家族の話。塾の案内(広告)も提示される。(横書き)

第18課

第16課から話題を引き継ぎ、家庭教師のアルバイトに初めて向かう学生と相手先の人との電話による会話文。(横書き)

第19課

日本のバレンタインデーについての新聞への投書。(縦書き二段組)

第20課

宅配便の不在連絡票から始まる、隣人との会話文。(横書き、不在票内一部手書き)

第21課

理想のアパートを空想する描写文と現実の生活が交錯するエッセイ。(横書き)

第22課

新聞紙上の人生相談のコラム(大学生の門限について)。(縦書き三段組)

第23課

ビル壁面の電光スクリーンに表示されるニュース(地震、国連世界人口会議、天気予報)。(横書き)

第24課

日本の諺(「三日坊主」「石の上にも三年」)を取り上げ、その意味の説明文と用法例の会話文。(横書き)

第25課

学生のパーティの準備とその失敗談を綴った物語。(横書き)

第26課

新聞記者が写真家の最新写真集について聞くインタビュー記事。(横書き)

第27課

学生が敬語を使いながら教師に推薦状を依頼する手紙。(横書き)

第28課

観光ガイドのパンフレットに載っている史跡(皇居)の説明文。連用中止形が初めて導入される。(横書き)

第29課

都会の集合住宅(マンション)についての二つの投書。立場や考え方の違いを比べながら読む。(縦書き二段組)

第30課

ポケットベルについてのエッセイ。(横書き)

4. 今後に向けて

基本的概念で述べたように、本Reading教材には従来の教科書に見られない様々な新しい試みがなされている。学生の評価は概ね好評で、楽しい、おもしろい、役に立つ等の言葉が聞かれる。ただ、基本姿勢の中の「若干の未習語彙ならあってもかまわない。訳をつけることによって、類推しながら読む練習になり、読解力を訓練することになる」「自然な文章を維持するために、1つか2つなら次の課で導入される文法事項を先行する形で入れてもよい」の2点は、読解教材を文法導入の後行型として捉えている教師には不評である。この点に関しては、基本姿勢の主旨が十分説明されれば解消されるのか、あるいは学習者の理解にも混乱を来しているのか、十分検証し、必要なら書き直さなければならない。もう一点は地名などローカルなものが特定の課で多用されることに関しての不都合で、特に海外や地域外で 사용되는場合問題になるようである。例えば、第6課の「田中さんの町」では、ICUの学生には人気のある吉祥寺という地名が、8行という短い文の中に5回も出てくる。

今後の課題としては、教師用マニュアルの開発があげられる。この読解教材には色々斬新なアイデアが入っているので、使用する教師にはそれらに気づいてもらい、それらのアイデアを生かしたよりよい授業プランを立てていただきたい。そのための、課ごとに特徴と目的、授業のすすめ方のモデルを示したマニュアルが必要である。

参考文献

田中真理(1991)「場面シラバスに関して」『ICU日本語教育研究センター紀要』

1、87-107.